

あとがき

日本の大学の日本語教育研究機関には、果たすべき役割が大きく分けて2つある。1つは、先進的で効率的な、そして体系的で充実したカリキュラムを設計し、運営すること。そして、もう1つは、留学生が彼らの本国の日本語教育では受けることができない、日本ならではの授業を設計し運営することである。その2つの役割を果たすことで、所属する大学の国際化を支えることができるのである。

まず、最初の役割—体系的で充実したカリキュラムの展開—を果たすためには、どれだけたくさんのコマを展開できるかによるところが大きい。上限なくコマを展開することができれば、充実したカリキュラムを展開することはそれほど難しくない。レベルを細かく分け、読解・聴解・会話・作文などのレベル別、漢字や語彙、文法などの要素別に必要なだけコマを置けばいいからである。しかし、現実はその甘くない。日本語科目の展開コマ数には上限があり、その中でカリキュラムを展開する必要がある。「限られた展開コマ数の中でいかに効率的に運営するか。」これは、日本語教育センターが開設当初から頭を悩ませてきた課題なのである。

そして、2つ目の役割—日本の日本語教育でなければ受けられない最先端で画期的な授業の設計—を果たすためには、日本語教育センター教員が常に新しい教授法、授業運営法、教材についての研究を行い、その成果を毎日の授業デザイン、授業運営に取り入れていく必要がある。言うまでもないことだが、日本語教育の総本山は日本である。世界中のどの国よりも、日本における日本語教育が一番進んでいる。日本国内の日本語教育機関は、海外よりもそのような最先端の研究や実践に触れる機会が多いため、この2つ目の役割を果たすことはそう難しくないように思える。しかし、こちらも現実はその甘くはない。常に、留学生が驚き、感動し、「日本で日本語を勉強できてよかった」と思えるような授業をデザインし、実際に実施していくためには、日本語教育に携わる一人ひとりの教員が、常に意識を高く持ち、しっかりした目的意識を持って授業を行わなければならないからだ。これは、そう簡単なことではない。まして、所属大学の中で「教育研究組織」としてきちんと認識されておらず、「研究」を大手を振って行うことができない状況の中で、2つ目の役割を教員一人ひとりがきちんと認識し、それに向かって進むことは難しいことなのである。

立教大学の日本語教育センターは、日本国内では後発の日本語教育研究機関である。しかし、開設当初から専任、教育講師、兼任すべての日本語教育教員の意識が非常に高く、先に述べた2つの役割をこれまで全力で果たそうと努力を続けてきた。毎学期ごとにFD活動をしっかり行い、多くの独自教材を開発し、現在は海外の大学の日本語教科書を共同で開発中であるし、変化の激しい留学生のニーズに少しでも迅速に対応すべく、これまで多くのカリキュラム改変を実施してきた。また、限られた展開コマを有効に活用すべく、少ない予算でWeb教材を開発し、学生が授業時間外で学べる環境を整えている。

そんな前向きな日本語教育センターが、さらなるカリキュラムの充実を目的として取り組んだのが「学習者の多様性を活かす新しい日本語コースの構築—TA及びICTの効果的活用及び教材開発—」である。レベルの異なる学生を1つのクラスで学ばせ、その効果を最大にするためにTAとWeb教材を活用するという試みだ。2012年から2014年度まで3年間、毎年少しずつ改善を行いながら実施してきた。その成果がこの報告書にまとめられているわけだが、我ながらうまくいったと思っている。日本語教育のトレーニングをきちんと積んだTAと科目担当教員のチームワーク、授業担当者の毎日の教材開発、TAが毎回の授業を通して行った教師として成長するための振り返り、それらすべてがいい方向に有機的に作用したことが今回の成果を生んだのだと思う。この報告書にも書かれているように、履修した学生からは、とてもポジティブな評価を得ており、「自分の国の日本語授業では経験したことのない授業だった」という、まさに日本語教育機関の果たすべき役割が果たせたことを示すコメントも得られているし、さらに、授業に参加したTAの多くは、日本語教師としての自己成長を自らが感じている。毎回の授業前と授業後に、TAと担当教員がしっかりと時間をとって振り返りを行い次の授業に臨むことは、TAにとっても担当教員にとっても簡単なことではなかったと思う。しかし、それを通して、TAは目覚ましい成長を遂げたのである。今回の試みは、留学生に対する日本語教育として、一定の成果があったのみならず、日本語教員養成の一環としてもすばらしい成果を上げたといえるだろう。

SGUの採択を受け、本学の国際化はますますスピードを上げて実施されていくこととなるだろう。そして、これまでも増して、多くの留学生が日本語教育センターの授業を受けることとなる。日本語教育センターは、今後も、立ち止まることなく、本学の国際化に少しでも貢献できるよう、日々努力を続けていく。

そして、その活動を通して、教育研究機関としての日本語教育センターの認知度をアップさせていきたいと思う。

前日本語教育センター長／異文化コミュニケーション学部長

池田 伸子